

うことである。新貨物線、三ツ沢線、市道高速2号線、地下鉄3号線、金沢地先埋立など、市政と市民が対立するいろいろの問題について両者の考え、意見を並列して、その背景や問題点を〈第三者の目〉で的確にレポートする——このことに、白書の大部分を費やすだろうと推測するわけだ。3年前、私は海外派遣研修生として欧米に出張させていただいた。その時ある都市で「横浜市はうらやましい。市の考えを、自分の手で市民に知らせる広報媒体をもっているのだから」といわれた。市民が〈税金のムダ使い〉だとして、こういうモノの存在を認めてくれないとのこと。「どっちみち、役所は自分の都合のいいことしかいわないのだから」というわけだ。そして非常に発達しているコミュニティペーパーが、自治体の動きを市民に詳細に知らせている。

日本でも、市民意識がもっと高まり、市政と市民の距離が縮まってくればくるほど、欧米のような市民感覚は強まってくるにちがいない。いままでの広報のあり方から、大きく脱皮しなければならぬのだ。

しかし現実には、これは非常に難しい。いわば、自分で自分の恥部をさらけ出すケースが出てくるわけであり、そのため、制約もきわめて多いからだ。そこで、今まで申しあげたようなことを十分承知している優秀なスタッフで臨みながら、この白書も結果的には「横浜市の広報活動の一環としての秀れた行政白書」にとどまっているのである。実際の自分の仕事を棚上げして、こんなコトをいうのはまったく恥しいのだが、一市民として読んだ場合、当然のこととして「行政への遠慮」が随所に見受けられるのも、残念なことだ。

〈市民局相談部広報課広報第二係長 大沢 浩〉

## 『外套』と白書

ゴーゴリの作品に『外套』というのがある。コッコツと何の変哲もなく、市役所で下積みの一職員として暮らしていた、哀れなほど、真面目で善良な主人公アカーキーの一生。決して何事もおきるはずのなかった彼の人生。しかし、ある日、食費も切りつめて新調したあの素晴らしい外套を、辻強盗に奪われてから、彼の人生は一変してしまう。彼の心は散り散りになり、乱れ、しまいには狂い死にさえてしまう。はては亡霊となり、奪われた外套を取り戻そうと、夜な夜なペテログラードの街路上に出没するに至るのである。

少数の貴族に搾取されつづけてきた多くの貧しい農奴や、農奴ならずとも『外套』の主人公のように自分の労働力以外、資産を持たない小市民たち……。当時のロシアは差別と窮貧と、そして哀しみと諦観に満ちていたのかも知れない。諦めと無気力と、個々人の善良さだけが息づいていたのかも知れない。もちろんその長い暗い冬から、やがてゴーリキの『母』等に見られるようなあの雪どけの春……虐げられた人々の力が結集され、湧き出る時期が訪れるのであるが……。

時代も国も遠く隔たった今の今……つまりこの白書に見られる市民の暮らしと気持ちは果して当時と大差があるだろうか。

大都市のもとに派生する住宅難、経済的貧困、疎遠化した人間関係の中で、我々は煩悶し、怒り、やがて半ば諦めを余儀なくされてゆく過程を経てちょうどアカーキーが立派な外套を求めたように、せめてもと一点豪華主義で、わずかに安らぎを見出し、ゆく小市民となり果ててゆくのではないだろうか。

この白書にはまぎれもなく、そうした人々のささやかなつづきや生活の一部が、断片的に反映されているのである。だが、各部共、あまり平均的

であり、換言すれば、もっと一部一部、焦点を絞って深く掘り下げ、一般市民に自分達の問題として、問い質す必要性があったのではないかとも思える。例えば発言の少ない住宅困窮者、行政集会に不参加にならざるを得ないほど諦め切った人々を対象に、その貧しさの由来を、労働条件から、あるいはエンゲル係数から、また社会保障の不備から分析する等の方法により、底辺の階層を生み出さざるを得ない社会科学的な根拠を示唆してもよかったのではないか。

しかし、白書としてこれまでに見られた多くのものは、客観的な内容一本であったが、この白書は行政に対する卒直な市民の声あり、また埋もれそうな弱い立場の人々への考慮もなされ、私にとって、今まで見うけた「〇〇白書」という概念を改めざるを得ないほど、心あたかな、血の通った流れのほりにいる印象を受けた。

この白書にあるように、住民集会等により、地域の中で、人々が連帯感を持ち、地域組織活動を通して理解の場を持ち、間接的にでもよい、市政への参加をすることにより、問題解決への方向でも見い出されるとするならば、『外套』の主人公のように、例え外套を奪われようとも、私たち住民は、魂まで奪われることなく、諦観主義からさえ逃れられるのではないだろうか。

〈衛生局保健課成人衛生係  
医療ケースワーカー 田口三枝子〉

## 福祉・福祉というけれど

本書は3部から構成されているが、第1部は役所がつくる白書ではなく、市民が自らつくる白書をめざして、市民が自分たちの生活と気持ちを自分たちの言葉でつづった「私の横浜」を集録している。その内容は、それぞれのなまの生活体験から

の発言で、どれもみな耳を傾けるべきものであり、読んで楽しいものでもあった。しかし、編集者自身が第2部の中でとりあげているように、もう一つの「私の横浜」が別に存在している。すなわちこのような企画に応募する市民は、やはり、一部の人を除き、比較的「ゆとりのある人たち」であり、これに応募しない人たちの中にこそ、生活の不安や悩みを多くもって困っている人たちが多く、また横のつながりをもたず、役所に対してもあきらめの感情が先にたってしまう人たちであることを考えると、横浜市民の生活白書をめざす以上は、この部分を拾い上げる努力をもっとするべきであった。次回の白書発行までの課題だと思う。その点、市民の暮らしと気持ち、市民の役所への距離などから市民の多層性を分析し、また市民の行政・政治への要望が潜在的にも顕在的にも福祉の問題に大きく傾斜してきていることをとりあげている第2部の「横浜の私たち」—市民生活の不安と自治体の課題—は、多くの考えさせる問題を提供しており興味深い。そこでそのうちのいくつかを紹介してみたい。

まず「福祉」ということばをとりあげ、市民が望んでいる「福祉対策」には、従来の貧困者対策としての社会福祉の面と、生活にやや安定感のある人たちだが、この異常なインフレのもとで、自らの生活基盤のもろさに改めて気づき、その危機感から老後や病気などの〈福祉対策〉を要望している面とがあることから、それらを合わせて市民福祉という概念で福祉を理解している。一方、住宅難世帯が多い低所得層では、身の回りの環境問題も切実であるはずだが、それよりも、より直接的な生活上の悩みや不安への対策が優先的に要望されている。そして、これらの人達は、役所にあまり要求も発言もしない、いわば行政からいちばん遠い距離にいる沈黙層であると分析している。これら2つのことを合わせ考えるとき、世間では